

Title	西南ドイツの局地市場：ロベルト・グラッドマンの所論を中心に
Sub Title	Local market in South-West Germany
Author	寺尾, 誠
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.10 (1962. 10) ,p.911(53)- 924(66)
JaLC DOI	10.14991/001.19621001-0053
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19621001-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

- (3) 全国市長会、東京市政調査会、富山市、第二三回全国都市問題会議文獻二、「都市の経済開発」、昭和卅六年、九七一―一三三頁。
- (4) 社会科学研究所、国際基督教大学学報II-A「地域社会と都市化」一九三―二九三頁。井出嘉憲「都市化と行政」
- (5) 井出嘉憲、前掲書、二四五頁。
- (6) 工業団地に関する最も包括的な研究書としては、William Beed: Industrial Estates—Tool for Industrialization, 1960. がある。
- (7) 「中小企業振興資金等助成法施行令第一条に規定する工場等集団化計画の内容の規程に関する運用方針について」(三五企庁第五八〇号、昭和卅六年四月一九日)
- (8) 「昭和卅六年度中小企業工場等集団化補助制度の実施について」(三六企庁第五八〇号、昭和卅六年四月一日)

むすびに

以上、地方公共団体の立地政策について、政策そのものに内在する諸問題を、その性格、目的、手段等に関連して指摘し、論じてきたが、これらの問題のうち、あるものは、地方公共団体というよりは、政府一般の立地政策に関連するものであり、又、その性格からいって極めて理念的な議論を必要とするものもあれば、他方、極めて特殊的、実践的であって、その解決には専ら技術的な議論を必要とするものもある。又、ここでは、これら問題に対して筆者なりの解決方向を提案したものもあれば、何らの解決も示さず、単に問題を提起したにすぎないものもあるが、要するに、ここで扱った問題は地方公共団体の当局者が、その立地政策を策定し、われわれが「立地政策はいかにあるべきか」を考察するに当って基本的なものと考えるのであり、地方公共団体が健全かつ自主的な立地政策をうちだすためには、これら諸問題に対する理論的、実践的立場からの十全な議論が要求されよう。

資料

西南ドイツの局地市場

—ロベルト・グラッドマンの所論を中心に—

寺尾 誠

(一) 総体的分析

西南ドイツといえば中世末期から近世初期にかけての、いわゆる「フッガー家の時代」の立役者であった大商業資本家達の出身地かつ根拠地として知られている。^(注1)これらの大商業資本家達は当時形成されつつあったヨーロッパの国際市場を舞台に遠隔地商業を営み、そこにおいて莫大な流通利潤を獲得していた。そして流通過程におけるこれら大商人の華やかな活躍のために、従来西南ドイツが何故これら商人の出身地かつ根拠地となりえたのかという問題が十分に究明されえないうらみがある。勿論そのような問題提起が全然ないわけではないが、全体としては「初期資本主義」的商業資本の発展とドイツの国民経済の発展を同一視する考え方が根強く残っているのである。^(注2)そして近世初期におけるこれらの商業資本の挫折によりドイツの国民経済もまた挫折したという結論が、ドイツ経済史の中で有力な位置を占めるのである。さてこのような学界の傾向に対し、先程の問題意識と関連して鋭い批判を加えたものとして、一九

西南ドイツの局地市場

五八年度に発表されたフリードリヒ・リュトゲの論文がある。^(注3)彼は従来も農業の分野において西南ドイツが中部ドイツと並んで封建的領主経済に対する農民経済の最も有利な地方であることを示しているのであるが、この論文では「三十年戦争勃発以前のドイツの経済状態」というテーマで従来の学界の傾向に疑問を投げかけている。すなわち彼は殆どの経済史家が、十六・七世紀の三十年戦争以前の時期に既にドイツ経済が停滞若しくは下降しつつあったという考えを示しているが、これは明白に生産過程に対する流通過程の過大評価、特に大商業資本の過大評価、この時代の信用機構や資本市場の過大評価、さらに上層市民のみを対象とした歴史分析等の方法的欠陥によるものであると考える。そして彼自身は当時のドイツに萌芽的にはあるが、統一的な「国民経済」 Volkswirtschaft を考えうるという立場から幾つかの指標を提出するのである。彼が第一にこのための指標と考えるのは流通過程そのもの変化である。すなわち彼は内陸都市を中心とした内陸商業の発展に注目する。特にフランクフルト・アム・マイン、ライプツィヒ、ニュールンベルグが当時の

ドイツ内陸の商業活動の中心となっていたこと、またヴェストファーレン地方においても沿岸都市より農村工業と関係のある内陸都市の経済活動がこの時代盛んとなったこと等の事実をあげて、彼は、当時のドイツには海外との遠隔地商業と並んで内陸商業の発展がみられることを指摘するのである。第二にリュトゲが「国民経済」の成立の指標としてあげるのは生産過程特に諸工業における発展である。ここでリュトゲは中部ドイツ、ヴェストファーレン、西南ドイツの三地方に注目している。中部ドイツの織物工業におけるツンフト・カウフといわれる商人資本の組織的な前貸体制の発展、ヴェストファーレンの農村織物工業の前貸体制における前進（アーヘン地方の農村金物工業にも注目）、西南ドイツの多彩な産業発展とくにファルツの鉄工業やヴェルテムベルグの麻織物業、鉱山業等が指摘される。リュトゲはこれらの事実によって商人資本の生産過程把握が、前貸制度としてあらわれているとし、それを流通過程における内陸商業の発展と対応したものと見てつかんでいる。^(注4)

以上のようなリュトゲの見解は、極めてユニークな問題提起を行っているというべきであるが、なお考究すべき点を含んでいる。特に前貸制度と内陸商業という折角の問題提起がなお流通過程からの把握という傾向にとらわれているために、生産過程における変化も前貸制度の確立としてしか把握されず、さらに流通における内陸商業も、内陸遠隔地商業としてしかとらえられないこととなるのである。このようなリュトゲの弱点を補うものとしてマックス・ウェーバーの市場構造論がある。リュトゲが「国民経済」という視点から

先にのべた問題提起をしたとすれば、ウェーバーは更にその「国民経済」の基底ともなるべき「局地内経済」^(注5) 地方的貨幣経済の存在を指摘し、これの有無を東ドイツと西ドイツ（特に西南ドイツ）との経済体制の相違の理由としたのである。すなわち彼は「農業制度と資本主義」という論文の中で最少の小邑内部及びそれら相互の財貨の交換、すなわち内国的交通^(注6) 地方的貨幣経済が東ドイツより西ドイツでは決定的に発展していることを指摘する。西ドイツは極めて多様な自然的生産諸条件が存在し、この基礎の上に小農民層による多彩な農業経営が行われ、かくして「比較的集約化された流通の展開への経済上の刺激」は東ドイツよりはるかに強いのである。そしてこのことは地方的市場のための都市の存在が東ドイツに比べてはるかに多いことにもあらわれるのである。これに対し東ドイツは広大な平野という単純な自然条件の下で、極めて単一な農業生産が行われ、かくして地方内部における財貨の交換の条件は非常に少く、むしろ遠隔地商業むぎの経済体制が成立していったのである。

さてリュトゲの問題提起、これを補完するものとしてのウェーバーの市場構造論は、西南ドイツが何故大商業資本の出身地かつ根拠地としての経済的活力をもちえたかという問題に多くの示唆を与えているのであるが、ここに紹介するロベルト・グラッドマンの分析もまた貴重な示唆に富んでいる。^(注6) 彼は西南ドイツと、特にその中核たるヴェルテムベルグについて主に都市とその市場構造を問題とし、局地市場 *Nahmarkt* をもってその特徴とするのである。

さてグラッドマンはまずウェーバー同様に東西ドイツの都市分布

度の相違に注目する。すなわち東プロシヤが五百五十平方キロメートルの都市、北ドイツ都市でも三百一三百五十平方キロメートルの都市であるのに対し、ヴェストファーレンでは二百平方キロメートル、南ドイツ全体で百九十平方キロメートル、ヴェルテムベルグでは百三十二平方キロメートル（その内とくにヴェルテムベルグ・ネッカー地方では八十三平方キロメートル）といった具合に極めて対照的である。^(注7) さらに都市の規模を調査してみると東と西の相違がはっきりする。今人口十万人以上を大都市 *Großstadt*、十万人以下二十万人以上を中都市 *Mittelstadt*、二十万人以下五千を小都市 *KleinStadt*、五千以下二千を地方都市 *Landschaft*、二千以下を極小都市 *Zwerstadt* とすると南ドイツでは大都市十、中都市四十、小都市以下六百三十七と地方的小都市の比率が圧倒的である。^(注8) さらにヴェルテムベルグについてみると大都市一、中都市八、小都市三十二、地方都市四五、極小都市六二の比率で、グラッドマンは極小都市の多いことに注目している。^(注9) そして都市分布度の大きいこと及び、地方的小都市の圧倒的比率という事実は、この地方における局地市場圏の成立を示しているというのである。グラッドマンはヴェルテムベルグについてこれら地方的小都市が遠隔地商業に適当な交易条件の無い場所に多いことからそれが局地市場を中心が発達したものであるとする。^(注10) 従ってそれは王や領邦君主、下級貴族の城塞 *Brig* や荘園庁 *Frühof*、*Königs Hof* の所在地、修道院や教会の所在地や裁判の行われる場所等の、近隣の農民の集まる機会が多い場所に発生している。^(注11) それは農村そのものの内部に存在する場合もあるが、むしろ多いのは農村の傍に、古い農村共同体と並

んで形成された市場定住地である。^(注12) このような局地市場はまた大いなる渓谷の間に存在し、かくしてその渓谷一帯の流域を自然の市場区域とするのである。^(注13) そしてそれはいわゆる週市 *Wochenmarkt* であり、毎週一定の曜日に市場が開かれるのである。この市場においては一方で附近の農民が主穀を始めバター、卵、家畜、鳥類等を販売し、逆にそこから衣料品、家具類、加工食品（ソーセージのような）馬具等の手工業製品を購入するのである。^(注14) 従ってその市場はまず小都市の手工業者と附近の農民の局地的交換の場であるといえよう。グラッドマンはかかる意味での週市は二十世紀においても豊かな農業地域たるアルプス山麓地方、ネッカー川流域地方、リース河流域において存続し、週市の日には農民の荷車が数百と週市めがけて集結し、祭りのような景観を示すと書いている。^(注15)

このような意味の週市は中世において先にのべた極小都市において中心的地位を占めていたが、同時にそれ以上の都市においても生活必需品交換の市場としては欠くことのできな市場として必ず存在していたのである。^(注16) しかし特に週市が極小都市において重要な役割を果たしたことの意味を考えてみよう。週市の意味する局地的な交換は、グラッドマンのいわゆるその地域の経済的豊かさ *Erststättigkeit* によるのである。^(注17) この豊かさは、農業における生産の進展と共にこれに基礎づけられた社会的分業によるものである。特に西南ドイツにおいては主穀生産の地域と葡萄栽培地域や農村家内工業地域が隣接して存在することは、局地的交換の中核としての週市の広範な発生を基礎条件である。^(注18) この他この地方は産業の分散化といわれる

程に多様な産業が農業地帯と入り組んで存在しているのである。この地方の社会的分業の進展は中世盛期から中世末期にかけてのヨーロッパ国際市場の成立と密接な関係をもっているが、それと同時に発生史的にはむしろ局地的交換との相関関係においてとらえられるべきである。従って局地的交換の基礎条件といふべき経済的豊かさとは、社会的分業の進展に基づく中産的生産者（農民）を中心とし、これに事実上の農業及び工業労働者の需要を加えたいわゆる民富のことを示しているのである。

このように考えてみるとこの地方において社会的分業の非常に前進した十四・十五世紀に極小都市といわれるものが急速に増大していることは非常に興味深い事実といふべきであろう。グラッドマンの示すところによると、ヴェルテムベルグ地方においては十二世紀に発生した都市は中都市二つ、小都市一つ、極小都市一つ、十三世紀には大都市一つ、中都市四つ、小都市十五、地方都市二十九、極小都市十七、十四世紀には中都市一つ、小都市六つ、地方都市七つ、極小都市二十七、十五世紀には小都市一つ、極小都市八つとなつてゐる。グラッドマンはこの統計から十二・十三世紀が中都市の建設期、十三世紀が小都市地方都市の建設期、十四・十五世紀が極小都市の建設期であるとしているが、まさにこの十四・十五世紀こそはこの地方の社会的分業の発展した時代であつたのである。

さてグラッドマンは、彼の局地市場 *Nahmarkt* について以上に紹介したようなすくぬれた把握を南ドイツの史実に基きつつ展開するのであるが、彼のこの市場論はいわゆるビュッヒャーの封鎖的な都

重要な指摘は、生産者自身か、その委託をうけた農村廻りの行商人 *Hauser* がこの地方に広範に存在したという事実である。^(注23) グラッドマンは局地的交換及び地方内の交換こそ、この地方の経済的活力の基礎であることを主張するのである。特に彼がアロイス・シュルテを引用して西南ドイツの近世初期の経済的繁栄の基礎が、交易条件だけによるのではなく、むしろその旺盛な産業活動にあるといふ時、^(注24) また商人の生産者支配が強くみられると共に、生産者自身の商人化の過程がこの地方に存在したといふ時、^(注25) 我々は先の市場構造論と共に、リュトゲの問題提起をはるかにのりこえるすくぬれた問題提起を感ずるのである。なおグラッドマンによれば西南ドイツの小都市の発生の基盤は以上のべた局地的、地方内の交換経済、特に前者であるとするが、同時にこれらの地方の都市経済の発展にとっては遠隔地商業の促進的意味を認め、その側面の考察も行つてゐることをつけ加えておきたい。^(注26)

さて以上のような西南ドイツの近世初期の市場構造は、一般的特徴であるから種々の地方的偏差を含みうるのであつて、これについては後に紹介する個々の地方毎の分析を参照せられたい。ただここにかかる偏差の起る契機について簡単にふれておけば、その主要なものとして農業における植民の時期及び植民の形態、社会的分業の進展度、及び政治的な領邦体制があげられる。第一の点については、局地的な市場構造の成立は農業の生産力の一定の発展を前提するのであつて、古い定住のある地域では古い起源の都市（ロマ・司教都市）が初期から存在しており、地方的小都市はこれとの関係におい

西南ドイツの局地市場

市経済の概念とは異なり、局地内の交換経済を意味すると共に、地方的市場圏とのつながりをも肯定している。特に重要な指摘としては、彼がヴィクトール・エルンストの研究に基いて指摘した交通路の変化の問題がある。^(注20) エルンストは中世の交通路、特に陸路について三種類の区別を行う。その第一は前史もしくはローマ時代 *vorhistorischen und römischen Strasse* の道路であつてこれは大部分ゲルマン人によつても利用されている。その第二はフランク王国の軍事道路 *Heerstrasse, Heerwege* で、中世の遠隔地商業用の道路である。中世後期にはこの道路の重要性が減つてくる。その第三は地方道路 *die Landstrasse* であつて、これは中世後期にできた村から村、小都市から小都市へとつなぐ道路であり、上の意味の遠隔地商業のためではなくて、局地的交換及び局地間（地方的）交換のためのものである。このような地方道路の広範な建設は明らかに局地的市場圏の成立と共に、個々の局地的市場圏をつなぐ地方的市場圏の成立をも強く意味しているのである。グラッドマンはこの他に地方的有力都市における地方的な小売市場 *Krienermarkt* の存在を指摘し、この市場に参加する小売商人 *Kriener* がその地方一帯の小都市の歳市 *Jahrmarkt* に参加するともいっているが、我々はここで先に指摘した週市の重要性と共に地方的小都市相互の交換の場としての歳市の重要性をも確認しなくてはならない。このような局地的市場圏同士の交換経済圏の構想については、我々はグラッドマンと共にルドルフ・ヘブケの経済的、地方的性の考へに十分注意を払ふ必要がある。^(注22) またこの地方内の交換経済の進展についてグラッドマンの

て成立する。新しい定住の地域では都市市場は比較的遅く成立し、古い都市との関係はない。しかし植民形態との関係は直接的にはむしろみられないのであつて、むしろ次の社会的分業の進展度如何で新旧いずれの定住地でも小都市、小市場の分布率は異なるのである。この意味で社会的分業こそ局地的市場の成立の決定的契機といふことができよう。ところでこれと共に見逃がせぬ第三の契機は政治的な体制の問題であつて、それは中世における都市市場建設が大小の封建領主との関係において行われたことを想えば、容易に理解されよう。そして西南ドイツが中世において領邦体制の最も分散した地方であつたことは、この地方の都市建設に大きな影響を与えたのであつて、特に中世後期の小都市以下の都市が他地方と比較して非常に多いのは、社会的分業の進展と共に大勢の君主の都市建設競争による面もあるのであつて、この意味においては局地的経済圏が相互の人為的都市建設の結果傷けられることにもなるのである。^(注27) グラッドマンが指摘しているように西南ドイツに近接するバイエルンでは領邦分裂がないために、無政府的都市建設が行われず中世的都市に対し局地的交換は農村市場において行われているのであつて、西南ドイツとの相違は明白である。^(注28) しかしそれと同時に、西南ドイツの小都市の圧倒的比率は、この地方の社会的分業とこれに基づくブルジョアの局地的交換の進展を意味しているのであつて、西南ドイツの経済的活力の基礎を示しているのである。かくして我々は西南ドイツにおける中世末期の市場構造の特殊性と共に、西ヨーロッパ封建体制下における市場構造一般の発展についての重要な示唆を

もグラッドマンの研究からひきだすことができると思われる。^(注29)

(二) 地方別の分析

さて以上のようなグラッドマンの市場構造論は具体的な地方毎の実証分析に裏づけられているのであって、以下簡単にそれを紹介したい。特に(一)農業における植民の時期・形態、(二)農業を中心とした社会的分業、(三)都市・市場の構造の三項に整理してみたい。

A、上ライン流域平野

一、植民 前史時代、ローマ時代の定住が検証される。村落は割替耕地制 *Gewandflursystem* に基づく大規模の集村である。(但し厳密の意味の *Hausendorf* ではない)^(注30)

二、社会的分業 主穀生産と並んで葡萄栽培が盛んで、良質の葡萄酒が生産される。その他ホップや果物等の商品作物の栽培も盛んである。他産業も多様に存在する。^(注31)

三、都市 第一にこの地方は古くからの定住地であるから多くのローマ都市、司教都市が存在する。バーゼル、ストラスブルグ、シュパイエル、ヴォルムス、マインツ等。第二にこの地方の交易条件がよいことから近隣の市場としてだけでなく遠隔地商業の市場としても役立ついわゆる中世的都市が存在する。フライブルグ・イン・ブライスガウ、ハイデルベルグ、ダルムシュタット、フランクフルト・アム・マイン等。これらの都市はローマ時代からの中核をもつものや村落の傍に建設されたものが多い。^(注32) 第三に特に葡萄栽培地域で局地交換の極小都市が多い。

B、シュヴァルツヴァルト

一、植民 この地方は森林地方であって周辺には古くからの定住もあるが、中心の部分は中世初期以来の開拓によって定住される。(十一世紀の大開拓の時代に聖俗の領邦君主により開拓される。)広い意味での集村はあるが、厳密な意味の割替耕地制度はない。むしろ散村 *Weiler* や孤立農家制 *Einkösesystem* も多い。^(注33)

二、社会的分業 古い定住地では零細農が多いが、中部・南部の新しい定住地では富農が多い。一般に穀草経済と牧畜が盛んに行われる。南部シュヴァルツヴァルトは純牧畜経済で主穀は他地方から移入している。葡萄栽培も盛んであり、森林地帯では木製品工業が農村工業として行われる。なお農村家内工業としてこの他麻織物工業が盛んであり、その他、刷毛・薬製品・ガラス・ブリキ・時計等の諸工業も存在し、鉱山業も十六世紀にはまだ盛んであった。全地域への産業の分散化がこの地方の特徴である。^(注34)

三、都市 この地方は新しい定住地が多く、かつ遠隔地商業の自然的条件が乏しいので、ローマ・司教都市や中世的大都市が少いが、上ライン地方と比較して農村的・地方的小都市が非常に多い。しかもそれらの小都市はツェリンガー家を始めとする領邦諸侯の都市建設により、城塞 *Burg* や村落の傍につくられたものが多いが、局地的交換を中心とするものである。そして麻織物その他の為の遠隔地商人と共に、かかる集約化された地方的流通経済の為の行商人 *Händler* や仲介商人 *Vermittler* も存在している。^(注35)

C、オーデンヴァルト

E、北部ファルツ、ザール地方

一、植民 この地方も森林地帯であり、古い定住もあるが、新しい定住多くブロック耕地制 *Blockflursystem* を伴った小散村が多い。^(注42)

二、社会的分業 主穀生産と共に牧畜も盛んである。その他葡萄栽培も盛んである。又鉱山業・石材業も存在する。^(注43)

三、都市 植民時期が新しい為、交易条件はよいにも拘らず古い都市は少い。要塞都市や市場都市と共に、近世に農村から都市となるものもある。この地方には十九世紀の炭坑開発と共に産業都市が出現する。^(注44)

F、ロートリンゲン、西部ファルツ

一、植民 古代からの定住の跡と共に、新しい定住も存在する。割替耕地制を伴った集村が支配的である。フランスに似て農村毎に新しい城塞がある。^(注45)

二、社会的分業 三圃制による主穀生産が主で、牧畜もこのための馬の飼育が多い。この地方は他地方と異なり農民間の短期小作制が普及し、総面積の三分の一が小作地である。^(注46)

三、都市 社会的分業の進展が少いことと関連し、都市も少く、近代の鉱山業と共に村落が産業労働者の定住地となる。^(注47)

G、ネッカー地方(ヴュルテムベルグの大半)

一、植民 古代からの定住地で、特にネッカー河下流の地域には新石器時代の村落の跡さえある。このような古い定住地域はシュヴァルツヴァルトの新しい定住地域と鋭い対立を示す。この地方は

一、植民 前史、ローマ時代の定住が個々にはあるが、全地域の体系的な開拓は中世初期から十二世紀にかけて行われる。十五・六世紀にガラス製造業者・木炭生産者等の新しい定住もつくられる。森林フーへの村落、*Waldhausendorf* がかなり存在し、これに散村や集村が加えられる。^(注36)

二、社会的分業 主穀生産と共に飼料生産や果樹栽培も行われているが、特に森林地帯と関係のあるガラス熔鉱炉や木炭焼場が普及し、その他石切場・鉱山・製革業等も存在する。^(注37)

三、都市 主な溪谷地帯に都市が集中して存在する。その他には辺境都市 *Randstädte* がある。殆どの都市がシュヴァルツヴァルトに似て地方的小都市で十三・四世紀に発生したものが多。^(注38)

D、ヴァスヴァーゲン森とファルツの一部

一、植民 ここも開拓による新しい植民地域で、散村と孤立農家制度が多い。^(注39)

二、社会的分業 農業では三圃制が全くみられず穀草経済と作物交替制度 *Fruchtwechsellsystem* が普及している。葡萄栽培も盛んである。南部では鉱山業、農村家内工業(毛織物)、ガラス工業等の産業が盛んである。^(注40)

三、都市 植民が新しいので都市の起源は新しく最古のもので十三世紀である。一方で城塞か修道院の傍にたてられた都市やそれ自身要塞 *Festung* の意味をもつ軍事都市等の中世的都市と共に、他方で葡萄栽培地帯を始め内陸には小都市が多く存在している。周辺の都市はこれに対し仲介商業を分担する。^(注41)

従って一般に古典的な大規模の集村が多く、割替耕地制度が支配的である。それと共に森林地帯も存在し、ここではブロック耕地制度の散村が支配的である。^(注48)

二、社会的分業 古い定住地では土地所有の零細化が進み、土地は肥沃であるのに、経済状態は余りよくない。これに対し新しい定住地域では一子相続制度の普及と共に中産的な豊かな農民層が存在している。封建領主層は小規模の騎士層が多く、農民はそれだけ有利である。葡萄栽培も普及している。特にホーエンローエの地域では一方に自家用の穀物だけを生産し、余暇を全て葡萄栽培に使用する溪谷地帯の葡萄栽培者 Weingartner が存在し、他方ではホーエンローエの地味豊かな高原で、重厚な牛もしくは馬の犁を使用する、勤勉な、豊かな主穀生産者が存在する。

農業では三圃制による主穀生産と共に、馬鈴薯や赤クローヴァ等の飼料作物、野菜類、ホップ、等の商品作物の栽培も盛んである。又果実、特に葡萄栽培が盛んであり、それから生産する葡萄酒は、この地方の需要のためのものであった。また牧畜と酪農経済も盛んで、厩屋での牧畜が近世以来広く行われた。集村の多い地域や葡萄栽培地域では相対的に過剰人口多く近代工業の基盤となる。^(注49)

三、都市 この地域は多くの溪谷が存在し、対外的にも対内的にも交易条件はよくない。この点では上ライン地方の方がはるかに有利であって、この地方では河川交通が東西の交易路の役割を果たしている。このような条件下ではあるが、社会的分業の進展と共に局地的交換のための小都市が非常に多いことは、すでにのべた通りであ

る。(この論文前半のヴェルテムベルグの統計を参照) 古くからの商業路近くの王庁、裁判所、市場を基盤とした都市と共に、村落の傍に発生した局地市場都市が多いのである。これは社会的分業の多彩な発展によると共に、領邦諸侯の都市建設競争の結果でもある。^(注50)

H、マイン河流域地方
一、植民 平野には古い定住が存在し(ヴェルツブルグ、シュヴァインフルト等)、森林地帯には中世初期からの開拓による新しい定住が多い。前者ではシュヴァーベン同様割替耕地制度の大集村が支配的であり、後者では分散した定住で、一部ブロック耕地の散村、一部孤立農家制の地域である。^(注51)

二、社会的分業 古い定住地が零細農の地域であるのに対し、新しい定住地は一子相続制と共に富農が多い。平野地帯では深耕農法と三圃制に基づく主穀生産が盛んであるのに対し、その他の地域では葡萄栽培が盛んである。また近世から改良農法も行われ、蕪菁や玉葱等の商品作物はヨーロッパ的に有名である。ホップ、葡萄の栽培地域としても有名で、とくにフランクエン産の葡萄酒は質が良く、十七・八世紀に最大の規模に達する。また果実栽培や牧畜も盛んである。都市における手工業もこの地方では独特の発展を示している。^(注52)

三、都市 都市分布度は下シュヴァーベンと同様に高いが、古い定住地帯であることを反映して古い司教都市や帝国都市も多い。帝国都市としてはニュルンベルグ、シュヴァインフルト、ローテンブルグ・アン・デア・タウバー、ディンケルビュール、ヴァイセンブ

ルグ等があり、これらは、この地方がドイツ帝国の中心部分だった

ことや、商業路にあたってること、農業における社会的分業が進んでいること等から、対外・対内商業の中心地として存在する。特にこの内ニュルンベルグが一頭地をぬいている。ニュルンベルグは王の建設都市で十一世紀には市場定住が存在している。この都市は王権に基づく商業特権で木材・ホップ・玩具・金物その他雑貨等の遠隔地商業の中心地として活躍すると共に、この地方一帯に対してもこれらの商品特に玩具・金物等の雑貨の小売市場 Kärnermarkt として存在し、この地方一帯の歳市にはニュルンベルグの行商人が積極的に参加している。その他ヴァイセンブルグ、シュヴァインフルト、ローテンブルグ等も産業と結びついた商業都市であった。さて司教都市としてはヴェルツブルグ、バンベルグ等があげられるが、特にヴェルツブルグはニュルンベルグに次ぐ商業都市として地元の木材・葡萄酒の集散地であった。

このような古い起源の都市と並び、一連の大小の中世的な都市が存在する。エアランゲン、フルト、アンズバッハ、コーブルグ、リヒテンフェルス、キッツィンゲン、バイエルスドルフ、マルクトブライト、マルクトシュテフト等がそれで、城塞や村落の傍に計画的に建設されたものが多い。これらは夫々の地域の特産物、例えば葡萄酒(キッツィンゲン、マルクトブライト、マルクトシュテフト)、山葵(バイエルスドルフ)、鉄、主穀(マルクスシュテフト、マルクトブライト) 農村家内工業の製品(コーブルグ、リヒテンフェルス)、金物(フルト)等の地方的市場を中心としていた。これらの多くは明らか

西南ドイツの局地市場

に遠隔地市場都市よりも地方的商品経済の為の中小都市である。

さらに葡萄栽培地域等では村落市場 Dorfmarkt や市場町 Markt 等も多くみられるが、その中には局地交換の為の基盤を余りもたない、葡萄の集散市場としての意味の方が大きいものも少なくない。

この地方の特徴は一方で中小都市の多いことと共にニュルンベルグを中心とする帝国都市(王権と結合した)の経済的繁栄にあるといえよう。^(注53)

I、シュヴァーベン・アルプス地方

一、植民 古代からの定住地でケルト時代の都市やローマ時代の市民的定住も存在している。これらの古い定住地は溪谷・高原・段丘に多く、ここでは典型的な割替耕地制度の集村が存在している。散村や孤立農家制もあるが、数的には少い。^(注54)

二、社会的分業 三圃制による主穀生産と共に山地の牧草地を基盤とする牧羊が盛んである。又、馬鈴薯・飼料・蕪菁・果実・葡萄等の栽培も行われ、特に中世においては麻生産が盛んであった。これは古い定住地域に多く、ここではこれらの麻を原料とした麻織産業が農村家内工業の形で広範に営まれていた。(地域的にはネッカー側となる)ネッカー側が産業地域の性格を帯びているのに対し、ドナウ側やアルプス高原では純農村的性格を帯びる。^(注55)

三、都市 ウルム、ロイトリンゲンの二帝国都市が中心にある。ウルムは麻織物市場として遠隔地商業に参加したが、ロイトリンゲンはむしろこの地方の市場として葡萄酒と様々の手工業製品の小売市場 Kärnermarkt として重要な役割を果たす。その他農業地帯では

穀物市場や家畜市場、とくに羊・羊毛の市場（ギルヒハイム、ウラ

ッハ等の）が存在している。また極小都市が全都市の半分も存在していることもこの地方の特徴であって、この地方が社会的分業の進展に基く集約化された、局地的流通経済の地方であることを示している。このことは麻織物の内この地方の必要とする部分のかなりがこの地方の行商人 *Handelsmann* により販売されていることによくあらわれている。この行商人はさらに原料の仲介（麻、いろいろの種子）や完成品の販売（呉服、小間物）も含めこの地方の小売市場を廻るのである。但し近代産業の勃興と共にその役割はへるのであるが、それでも産業地域の労働者の為の食料品購買に使用されるのである。^(注56)

J、リース地方

一、植民 定住は古いので、割替耕地制の集村が多い。但し、ここでは中農・富農が多い。^(注57)

二、社会的分業 主穀生産と菜園が多く、ホップの栽培も盛んである。その他、鉄が上ファルツのアムベルグを中心に産出され、一部はここで加工されていた。^(注58)

三、都市 交易条件はよくネルドリゲン^(注59)の歳市は有名である。またアムベルグも鉱工業の都市として有名である。しかし他の都市は農業地帯にあってその地方の需要に応じた極小都市が多い。その大半は城塞が市場に基いて建設されたものである。^(注59)

K、フランケン・アルプス地方

一、植民 古くからの定住地で、シニヴァーベン・アルプス地方と同様の特徴をもっている。但し新しい定住（散村等の）も南部に

^(注60)ある。

二、社会的分業 主穀生産と共に葡萄栽培も盛んである。ホップ栽培も多い。又アムベルグに近い地方では鉄鉱山や熔鉱炉も多い。^(注61)

三、都市 ニュルンベルグからの交通路の通過地域にあり、都市もこの古い商業路に沿ったものが多い。社会的分業が余り進まない地方なので、商業都市の性格が強い。但しその起源は新しく、十四・五世紀のものが多く、しかも都市の大半は極小都市にすぎない。小都市（グラッドマンの規定した）にあたるものは、先のアムベルグと他に二つの都市があるのみである。但し極小都市の中には商業路から離れたものが多く、城塞もしくは市場定住がその起源である。新しい定住地方にも城塞都市や極小都市がある。^(注62)

L、フィヒテルベルグとペーマーヴァルト

一、植民 この地方は森林地帯で新しい定住地域である。その開拓は修道院によるもので、定住形態は散村・孤立農家・森林フーヘ村落等の小定住が多い。但し割替耕地に近い農地制度も存在している。^(注63)

二、社会的分業 土地は肥沃でないが、定住しうるばかりか、富農も存在している。主穀生産と牧畜が行われ、経営方式は三圃制と穀草経済が並存している。この地方は中部ドイツや北部ドイツとの交易条件がよく、マルクト・レドヴィッツを中心に繊維産業（農家内工業）や鉄・金・その他の鉱山業が行われる。人口密度も近隣より高い。^(注64)

三、都市 東バイエルンとの境界では都市は少ないが、フィヒテル

山地では都市が多い。小都市十八に対し、極小都市六という割合である。しかもこれらの都市の起源は新しく、十三世紀に三都市、十四・五世紀（とくに十四世紀）に十四都市、十九・二十世紀に七都市と発生している。その大半は市場としてか、直接都市として建設され、村の傍につくられたものが多い。

この地方は社会的分業の進展と共にペーメンとドイツとの交易路にあたり、その上、バイエルンから中部ドイツへの交易路の通過点でもあるので、都市の経済活動旺盛である。^(注65)

M、アルプス山麓地方

一、植民 古い定住地と新しい定住地の混合地域である。前者はとくに下バイエルンを含むドナウ流域に多いが、その他にもポードン湖西部が入る。後者はアルゴイ地方やラインとドナウの分水嶺附近に多い。前者では割替耕地制度を伴った大集村、後者ではプロック耕地を伴う散村か孤立農家の小定住が多い。尤も古い定住地域でも集村の間に小定住が散在している。この内アルゴイ地方の開拓は中世初期以来のもので、十八・九世紀には、さらに散村の孤立農家への分解が広範に行われている。^(注66)

二、社会的分業 小定住地域では中農・富農が多いが、バイエルン地方も含め平均して農民の生活程度は豊かである。だからこの地方は富裕農民 *Protsenbauer* の地域といわれる。ドナウ流域では三圃制の下で主穀生産が行われるのに対し、南西部とくにアルゴイ地方では穀草経済が支配的で、主穀生産は自己需要のために過ぎない。なお農業ではその他果実や麻栽培が盛んで、特に後者は中世末

西南ドイツの局地市場

から近世にかけて西南部の農村家内工業の原料として重要な役割を占めた。またホップ（下バイエルン、ポードン湖畔）、葡萄（ポードン湖西部、ヘガウ）、家畜（アルプスに近い地方の全てで重要な産業として行われ、十八世紀には共同地の分割をもたらす）等の特産物が生産されていた。バイエルン地方が主に農業地帯であるのに対し、シニヴァーベン、アルゴイ地方は都市手工業及び、農村家内工業（近世初期には麻織物、バルケント織物工業）等が盛んで準産業地帯であるが、しかし他の西南ドイツ地方と比べると割り合いに農業地帯的性格が強い。^(注67)

三、都市 交易条件はドナウ河による東方交易や、イタリアへのアルプス越えの交通により、中世の国際貿易の中心地としての好条件がある。またポードン湖畔もスイス廻りのイタリアへの交通路にあつてはいる。従って古い定住地との関係からも、一方で古い起源の商業都市も多いが、新しい定住地もあり、しかも地域的な経済条件も異なるので、新しい起源の都市も存在する。一般的にいえばこの地方の都市は概して小規模のものが多く、地域的にみれば

a、上シニヴァーベン 新旧の定住の混合地域であつて主穀生産と共に麻の生産が有名で、アウグスブルグとウルムの商工業都市が代表的である。局地市場は都市としてよりも農村市場II市場町の形で存在する。

アウグスブルグ ロマ時代からの都市で十一世紀に既に市場が開設されている。この都市の基礎は麻織物生産を始めとする手工業にあり、さらにフッガーに代表されるように遠隔

地商業にも積極的に参加している。

ウルム 交易路にあり軍事的な意味もつ。この都市は一方でイタリアとシュヴァーベンの仲介商業(香料やレバントの木綿の輸入等)とバルケント織物の輸出商業等の遠隔地商業の中心地である。と同時に他方では地方的需要にこたえる地方市場の中心である。それはこの都市の週市 Wochenmarkt の重要性によく示されている。

b. ボーデン湖畔 交易条件がよく、社会的分業も早くから発達しているため、古くからの都市が多い。これらの都市は余り大きくなく、村落の傍に建設された都市もある。これらの都市は商業都市であると共に、局地市場の中心としての意味をもつ。(週市の活潑な役割) 代表的なものとしては古代からの定住の跡に建設された司教都市であるコンスタンツがある。この都市はまずボーデン湖附近の麻織物の輸出商業の中心市場であると共に、この地方の主要市場でもある。

c. バイエレン地方 この地方が他の西南ドイツと異なる特徴は領邦君主が強大な統一権力を有していることである。従って都市は官庁都市か商工業都市に限定され、局地的市場は市場 Markt として存在する。(西南ドイツの極小都市にあたるはこの市場である。)

都市としては、レーゲンスブルグ、ムッサウ、ツェンケン、ランツェット、インゴルシュタット、フライジーン、シエトラウビンク、ザルツブルグ等があげられる。とくにシエ

トラウビンクは主穀市場・家畜市場の中心地で、主穀はアルプス地方へ、家畜はウルム、ネルドリンゲン、ディンケルスビュール等へと送られると共に、下バイエレンの地方的市場としても近隣の森林地帯と農業地帯の間において重要である。^(注68)
N. バイエレンのアルプス地方
一、植民 古い定住もあるが、中世に体系的開拓が行われた地方である。従って散村、孤立農家が多い。^(注69)
二、社会的分業 主穀生産は従属的な意味しかもたず穀草経済が支配的であり、牧畜が盛んである。その他森林が多いところから木材等が行われ、鉱山業もある。^(注70)
三、都市 バイエレンと同じ特徴で、都市は商業都市に限られ、局地市場は市場としてしか存在しない。^(注71)

(注一) Heinrich Kramm, *Landschaftlicher Aufbau und Verschiebungen des deutschen Großhandels am Beginn der Neuzeit*, Gemessen an den Familienverbindungen des Großbürgertums, *Verteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, Bd. 29, 1936, Heft 1, SS. 1-34.

(注二) 原書 Karl Lamprecht, *Deutsche Geschichte*, Bd. 4, 1920 & Richard Ehrenberg, *Das Zeitalter der Fugger*, 1896, 444-45.

(注三) Friedrich Lütge, *Die wirtschaftliche Lage Deutschlands vor Ausbruch des Dreissigjährigen Krieges*, *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, Bd. 170, 1958, SS. 43-99.

(注四) ヲリョットの論文については社会経済史学二五卷六号に私の

紹介論文がある。

(注五) Max Weber, *Kapitalismus und Agrarverfassung*, *Zeitschrift für die Ges. Staatswissenschaften*, 108, 3.

(注六) ヲリョで紹介する彼の著作は Robert Gradmann, *Die städtischen Siedlungen des Königreichs Württemberg*, *Forschungen zur deutschen Landes- und Volkskunde*, Bd. 21, 1914 v (Die städtischen Siedlungen v. 1870) Vergleich, Süddeutschland, Bd. 1, Bd. 2, 1956 (Unveränderter fotomechanischer Nachdruck der 1. Auflage von 1931) の「ドイツの歴史」な最後の著書は極めて包括的な研究である。ヨリョットの論文のテーマと関係があるヨリョットを紹介した。

(注七) R. Gradmann, *Süddeutschland*, Bd. 1, S. 159.

(注八) *Ibid.*, S. 159.

(注九) R. Gradmann, *Die städtischen Siedlungen*, S. 143-148.

(注一〇) *Ibid.*, S. 164, *Süddeutschland*, Bd. 1, S. 166.

(注一一) R. Gradmann, *Die städtische Siedlungen*, S. 164, *Süddeutschland*, Bd. 1, S. 161.

(注一二) *Die städtische Siedlungen*, SS. 159-163.

(注一三) *Die städtische Siedlungen*, SS. 164-165, *Süddeutschland* Bd. 1, S. 160.

(注一四) *Die städtische Siedlungen*, SS. 173-174, *Süddeutschland* Bd. 1, S. 184.

(注一五) *Ibid.*

(注一六) *Süddeutschland*, Bd. 1, S. 161, 184, Bd. 2, S. 421.

(注一七) *Die städtischen Siedlungen*, S. 173, *Süddeutschland* Bd. 1, S.

西南ドイツの周市市場

169.

(注一八) *Die städtischen Siedlungen*, S. 173, SS. 169-192, *Süddeutschland*, Bd. 1, SS. 169-171, SS. 182-184.

(注一九) *Die städtischen Siedlungen*, SS. 170-171.

(注二〇) Viktor Ernst, *Beschreibung des Oberamts Münsingen*, S. 339 ff. zitierten von R. Gradmann, *Die städtische Siedlungen*, S. 154.

(注二一) *Süddeutschland*, Bd. 1, S. 184, Bd. 2, S. 256, S. 311.

(注二二) Rudolf Häpke, *Die ökonomische Landschaft und die Gruppenstadt in der älteren Wirtschaftsgeschichte*, *Aus sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, SS. 82-104.

(注二三) *Süddeutschland*, Bd. 1, S. 170, 184.

(注二四) Aloys Schulte, *Geschichte des mittelalterlichen Handels zwischen Westdeutschland und Italien*, 1900, S. 603 zitierte von R. Gradmann, *Die städtische Siedlungen*, S. 190.

(注二五) *Süddeutschland*, Bd. 1, S. 170, 184.

(注二六) *Die städtische Siedlungen*, SS. 175-187.

(注二七) *Ibid.*, SS. 168-169, 174.

(注二八) *Süddeutschland*, Bd. 1, S. 166, Bd. 2, SS. 421-422.

(注二九) これについては大塚久雄「近代資本主義の系譜」(昭和二十一年)所収第十論文「イギリスにおける近代都市の系譜」(二百一十一頁-二百一十一頁)。同氏「欧州経済史」(昭和三十一年)一六頁。米川伸一「中世イギリスにおける「農村市場」の成立」*社会経済史学*二十二卷三号所収。角山栄「中世末サフオーックにおける農村毛織物工業の発展と「農村都市」の成立」*社会経済史学*二十三卷三号所収。

- (注30) Süddeutschland, Bd. 2, SS. 20-22.
- (注31) Ibid., SS. 22-24, 30-31.
- (注32) Ibid., SS. 32-45.
- (注33) Ibid., SS. 70-76.
- (注34) Ibid., SS. 78-82.
- (注35) Ibid., SS. 83-85.
- (注36) Ibid., SS. 97-98.
- (注37) Ibid., S. 99.
- (注38) Ibid., SS. 100-101.
- (注39) Ibid., S. 104, SS. 116-117.
- (注40) Ibid., SS. 120-123.
- (注41) Ibid., S. 124.
- (注42) Ibid., SS. 133-134.
- (注43) Ibid., SS. 135-137.
- (注44) Ibid., SS. 137-141.
- (注45) Ibid., SS. 152-155.
- (注46) Ibid., SS. 157-159.
- (注47) Ibid., SS. 160-163.
- (注48) Ibid., SS. 196-199. Die städtische Siedlungen, SS. 195-202.
- (注49) Süddeutschland, Bd. 2, SS. 200-203, 208-211, Die städtische Siedlungen, SS. 189-191.
- (注50) Süddeutschland, Bd. 2, SS. 203-207, 211-219.
- (注51) Ibid., SS. 237-240.
- (注52) Ibid., SS. 241-243, 248-251.
- (注53) Ibid., SS. 244-248, 251-252.
- (注54) Ibid., SS. 304-305.
- (注55) Ibid., SS. 306-308, 312-315.
- (注56) Ibid., SS. 309-311.
- (注57) Ibid., S. 323.
- (注58) Ibid., S. 323.
- (注59) Ibid., SS. 323-324.
- (注60) Ibid., SS. 347-348.
- (注61) Ibid., SS. 349-350.
- (注62) Ibid., SS. 351-352.
- (注63) Ibid., SS. 363-365.
- (注64) Ibid., SS. 368-371.
- (注65) Ibid., SS. 366-368, 371-372.
- (注66) Ibid., SS. 410-414.
- (注67) Ibid., SS. 415-418, 424-426.
- (注68) Ibid., SS. 417-422, 426-446.
- (注69) Ibid., SS. 467-468.
- (注70) Ibid., SS. 468-471.
- (注71) Ibid., SS. 473-474.

研究ノート

社会政策研究と社会経済史学

——岡田与好著「イギリス初期労働立法の歴史的展開」によせて——

飯 田 鼎

最近、わが国の経済学関係の学会には目立って沈滞の症状があらわれはじめるといわれる¹⁾。その原因はどこにあるのか、なぜ沈滞におちいなければならないか、その理由はいろいろあるであろうけれども、とくに重要と思われるものは、戦後十七年もたった今日、学界における「通説」ともいふべきものが、理論、歴史あるいは政策部門のそれぞれの領域に支配的な地歩を占め、ひとつの伝統的な重みをさえ感じさせるほどに固定化されつつあること、従ってそれぞれの部門の内部でこれらのいわばオーソドックスな学派や支配的な理論にたいして徹底的な批判を行うことが、従来の方法論をもってしては次第に困難になりつつあること、そして第二にはこれと関連するのであるが、各研究者のテーマが非常に広い範囲にわたって分散し、極度に分化してしまっているために、自己の専門とする領域に関する以外は、交流がなくなり、そのために「共通の広場」を見うしなっていることも指摘されなければならない。そしてわが

社会政策研究と社会経済史学

社会政策学会もその例外ではありえない。

昭和二四年、学会が再建される一年前、戦時中以来、社会政策論の定説として認められてきた大河内教授の理論にたいして、服部英太郎教授が放った鋭い批判は、やがて社会政策の本質をめぐる長いそして活発な論争の口火となったことはよく知られているが、当時わたくし自身は、研究室に入ったばかりで、社会政策研究については全く五里霧中の状態であったにもかかわらず、この論争に異常な感動を覚えたことを今でもはっきりと記憶している。論敵の大河内教授を呼ぶに、わざわざ「基本問題の著者」というような書き方をされた服部英太郎教授の難解ではあるが読みごたえのある文章は、たしかに若いわれわれに社会政策研究の重要性を改めて認識させずにはおかない迫力と説得力をもっていた。そしてこの論争の規模が次第に大きくなり、それへの参加者の数が、次第に多くなるとともに、いわゆる本質論争の論点は、社会政策論における生産力説としての大河内教授の理論のもつ弱点に集注され、それらが次第に明らかにされたのであるが、同時にその批判が、実にさまざまな視点か